

銀行の貸出金は何故減るか (貸出金減少の裏側にあるもの)

銀行の貸出金減少が進んでいる。減少の始まったのは数年前からのことで最近のことではないが、金融システムの安定云々が云われる現在でも銀行は順調(?)に貸出金を減らしている。新年早々そのことを伝える報道が相次いだ。

1月5日報道された経済企画庁の98年度国民経済計算によると、一般企業の借入金は前年比36兆円も減少した。一般企業の借入金減少は3年連続で、同庁では金融機関の資産圧縮(貸出金回収)、企業の負債削減(借入返済)、社債等直接金融へのシフト、の3点を借入金減少の要因と分析している。

また1月13日報道の全国銀行協会の預貸金速報では、99年12月末の全国銀行(信金や信組等は除く)の貸出金残高は、対前年比で4%減少している。金額に換算すると19兆円を超える。減少の要因として、設備投資低迷による資金需要の停滞、直接金融へのシフト、の2点が挙げられている。

98年に続いて99年度もかなりの減少となったのは事実のようだが、注目しなければならないのはその原因であり理由である。

1月13日、日銀より「99年12月の貸出・資金吸収動向等」が公表された。これは毎月中旬に公表されるもので、銀行の預貸金動向が良く判る資料である。この資料より、昨年1年間の預金貸出金動向を追うと次の通りになる。

(単位: %)

	1~3	4~6	7~9	10~12
貸出	4.2	5.5	6.3	5.7
預金	3.2	3.6	2.8	2.9

(貸出は全国銀行5業態、預金は3業態)

全国銀行協会と日銀のデータが何故違うのかは良く判らないが、この日銀データから、昨年1年で約30兆円貸出が減少した、「貸し渋り」騒ぎと貸出減少の関係は薄い、預金が増加し、銀行の資金ポジションは好転している、等が指摘できる。事実都銀では、昨年3月預金残高が貸出金残高を初めて上回った。長い間のオーバーローン(貸出残が預金を上回る状況)が解消されたのだ。戦後初のオーバーローン解消は、好ましい現象なのか、それとも不吉な兆しなのか。

預金の増加、貸出の減少は、当然ながら資金の

余剰となって跳ね返る。そうした余剰資金は何処で運用されているのだろうか。

もちろん短期金融市場でゼロに近い利回りで運用している資金も相当量あるが、余剰資金の多くは国債購入に向けられている。都銀はかつてないほど大量の国債を保有していると云われている。そのことが齎すリスクについてはここでは触れないが、銀行の国債大量購入が長期金利の低位安定に繋がっているのは事実であろう。問題は、銀行が国債購入に向かう理由だ。そこにこそ今の銀行の本当の姿が見えてくる。

最も大きい理由は、リスク資産の保有を回避したい意向が強いことにあると推測される。国内株式や外国株式、あるいは外国債券にしても価格変動リスクや為替リスクの面でリスクが高く増やせない。貸出にしても、資金需要の弱さや社債等直接金融へのシフトを理由としているが、それだけではなく貸出リスクを量りかねている現実があるように思われる。

債務過剰の企業は、確かに財務リストラ・債務削減意欲が強く資金需要は弱いかもしい。しかし一方で資金需要の強い企業群もある。今資金需要の強い企業は、どちらかということ資産も担保もない新興企業群である。そうした企業群が東証マザーズやナスダック・ジャパン等に殺到するのは、銀行の資金供給能力の低下と無縁ではない。担保や保証にこだわり過ぎた結果、銀行が企業審査力を低下させたのは否定できない現実である。「事業資金は原則保証協会保証扱いとなります」という言葉は、本来銀行員として最も恥ずかしい言いようなのだ。

だぶつく資金で国債を買っている銀行は、どのようなビジョンを持って業務を展開しているのだろうか。国の借金の円滑な調達に協力するという意思の表明であろうか。私には良く解らないが、銀行の足腰がかなり弱くなっているように見ているのは私だけではないだろう。

大手企業は銀行借入も減らしているが、社債での資金調達も減らしている。固定資産売却の他、銀行との持合い株を売却して何兆円もの資金を捻出している。銀行がリスク管理強化の名目で貸出を減らしている間に、企業の銀行離れが確実に進行しているのだ。銀行の大幅な貸出金減少は、日本の金融システムに地殻変動が起こっている証左とみる必要がある。